

序¹

1. 梵文法華經校訂本成立の背景

本書のローマ字テキストの原本である、英国・アイルランド王立アジア協会 (Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland) 所蔵梵文法華經写本は、原典テキスト引用の際に基準となっている校訂本 *Saddharmapundarika*, Bibliotheca Buddhica, 10, の底本として使用された紙写本である。この校訂本は、1908年から1912年にかけてサンクトペテルブルクで出版された²。これがいわゆる「ケルン・南條本」である。南條文雄 (1849–1927) の序によれば³、1880年頃、ロンドンのアジア協会所蔵の写本⁴を笠原研寿 (1852–1883) と書写し、作業が完了すると2人は直ちにケンブリッジに赴いて、R をケンブリッジ大学の2写本 C4, C5 によって校合した。その後、南條は一人でロンドンの大英博物館所蔵の写本B⁵によってテキストを校合した。さらに1883年、ワッターズ (Thomas Watters, 1840–1901) 将来本 W を借りて校合した。これら5本の写本以外に、フコー (Philippe Édouard Foucaux, 1811–1894) の石版刷りのテキスト *Parabole de l'Enfant égaré*, Paris, 1854 に収められたナーガリー文字の第4章のテキスト (Kn の P)⁶と、ワイリー (Alexander Wylie, 1815–1887) 所有の木版テキストに収められていた第24章 (普門品) のテキストを参照している。これは、ワイリーが北京で入手したものである⁷。南條は1884年帰国し、河口慧海 (1866–1945) が1903年に将来した T8 を校合に用いた。1905年、南條は清書したテキストの全文をケルン (Hendrik Kern, 1833–1917) に送り、ケルンがカシュガル本によって最終的な校合作業を行い、1908年の第1分冊の発刊に至るのである。実に、30年にわたる労作業であった。

2. 校訂本の問題点について

R が、15種類⁸以上の紙写本のなかで、重要な位置を占める理由はこれで明らかになったと思う。この底本を可能な限り正確にローマ字化することによって、本書は次の2つの問題点を解明するための基礎資料を提供することができた。すなわち、(a) 脚注の読みが必ずしも正確ではなく、遺漏も見られること。(b) 校合に使用した写本のなかから、ある特定の写本の読みを校訂本の本文として採用する際の基準が曖昧で、一定の構想に基づいて、校訂本が作成されていないことである。

(a)の問題は、結局、個々の写本読解の正確度という課題に還元される。このことを校訂本のすべての脚注について検証するためには、膨大な労力と時間が必要である。しかし、この作業から期待できる学問的成果はほとんどないと筆者は考える。一方、(b)の問題は、今後の梵文法華経文献学の分野で、豊かな収穫が期待できる分野である。(b)の問題とは、言うまでもなく、戸田宏文(1936-2003)が晩年に全精力を傾注し、探求した「ネパール系写本のグループ分け」の研究に帰着する⁹。「ネパール系写本のグループ分け」という視点からいえば、ケルンが校訂の最終段階でカシュガル写本の読みを本文に編入した問題がある¹⁰。この中央アジア系の写本は、ネパール系写本と異なる系統として区別し、考察されるべきであると筆者は考えている。しかし、ここでは、校合に使用された写本のひとつとして、A, B, Ca, Cb, K, W, P と共に考察の対象に含める¹¹。

3. 戸田宏文のいわゆる「R系」について

他の梵語仏典写本と比べて、梵文法華経の写本の数はとびぬけて多い。校訂本の準備段階で今日のように多数の写本の存在が確認されていたなら、南條もケルンも、異なる系統の写本群の存在に気づいて、それらを注意深く検証し整理した後に、校訂本を作成したにちがいない。当時と今日の時間のズレが、結果的に校訂本の本文と脚注の読み混乱をもたらしたと筆者は考えている。しかし、それが多くの学者の関心を呼んだことも事実である。特に、前述の(b)の問題は非常に重要であり、これが解明されれば、異なる系統の写本を無原則につなぎ合わせて編み上げた「ケルン・南條本」が内包する問題は一挙に解決する。それだけではなく、「ケルン・南條本」を超える新たな校訂本作成への展望が大きく開ける。戸田宏文が、「ネパール系写本のグループ分け」への作業を最優先課題として取り組み、グループ別テキストの確定を企画したのは当然の推移であった¹²。

さて、「ケルン・南條本」の底本となった、このR写本は、T9, T4, T5 にひじょうによく類似した写本である。戸田宏文は、R, T4, T5, T9 の紙写本群を常づね「R系」と名づけ¹³、写本読解の際の重要な道しるべとしていた。A2, A3, T8, P3 等の紙写本が、この「R系」に部分的によく一致する¹⁴。ここで「部分的に」という意味は、一致する箇所が何章にもまたがる場合も含めるが、その長さは、個々の写本によって同一ではない。「R系」は、紙写本間のグループの違いを見極める目安になるだけでなく、貝葉写本と紙写本を比較する際の重要な視点ともなる。「R系」に限らず、あるグループの代表的な写本を正確にローマ字化しておけば、それを道しるべとして、同じグループの写本群を迷うことなく解読することができるし、それらの同じ箇所をすべて読んだことにもなる。

しかし、いかなる写本であれ、それが最後まで一貫して、あるグループの読みを維持するものではないことも事実である。どこでその読みの一貫性が途切れるかは、個々の写本でバラツキがあり、それまで一貫していた読みから外れた写本が、他のどのグループの読みにも紛れ込んで行くか、他のグループのどの写本が別の写本グループの読みに近いのか、また、それがどこで本来の所属グループの読みに戻っていくかといった、ネパール

系諸写本間の読みの絶え間ない変動を、常に正確に追尾し、その本来の所属グループを見極めなければ、かえって、大きな錯誤を犯すことになる。これは、一筋縄ではいかない、気紛れな写本の読みとの鬼ごっこである。可能な限りの正確な読みによって、ミクロ・マクロの視点から、この複雑さを追っていく必要がある。それでも、この気紛れのなかに一定の法則のようなものが存在する。それを鋭敏に嗅ぎ分けるという職人技を体得したのが、30年以上、梵文法華経写本の読解に取り組んだ戸田宏文であった。彼はしばしば、みずから「これは、もう、職人ですよ」と呟いていた。いずれにしても、「R系」写本群の読みの結束は固い¹⁵。戸田宏文がこれらを「R系」と命名しただけの頼りがいのある、写本読解の有力な道しるべの一つである。この発見は、彼の独創であり、梵文法華経写本研究史上最大限に賞賛されるべき学問的成果の一つである。「異読を写本と共に無原則に羅列するが如きは、意味をなさない。」¹⁶という彼の言葉は、その極意を遺憾なく言い表している。

4. 校訂本に見られる (a) と (b) に関する具体例

まず、(a) の問題点に関して、校訂本の1, 2ページと、102, 119ページ (第4章) の若干の脚注について検証とその修正を試みたい。

Kn 1

(1) fn. 2) *śrī* added in W. は、*śrī* added in W. K. (= T8) となる。W は現在所在不明の紙写本であるが、Kn の脚注の指摘から、第1章から第3章 (Kn 1-99) までは K に類似した写本である可能性が高い。

(2) fn. 4) *lyam* の *m* は、明らかに K の誤写と見られるので、*lyam* K. only. となる¹⁷。

(3) fn. 5) *ram* K. W. は、*ra* Ca. (= C4) *ram* K. W. left out in Cb. (= C5) となる。なお、Cb の Kn 1.1-2.8 は失われている。

(4) fn. 7) *jñānā* K. は、*jñānā* A. (= R) K. *ājñā* Ca. B. O. となる。この脚注を (b) のグループ分けの視点から言えば、底本とした A の読みを捨てて、Ca, B, O の読みを校底本の本文に採用した根拠に言及する必要がある。

(5) fn. 8) *jñābhijñātai* A. Ca. Cb. *jñātābhijñātai* B. O. *jñānābhijñānai* K. *jñānābhijñātai* W. は、*jñābhijñātai* A. *jñātābhijñātai* Ca. °*tai* O. *jñātā'bhijñātai* B. *jñānābhijñānair* K. *jñānābhijñātai* W. となる。

ここでも、A の読みを捨てて、W の読みを校訂本の本文に採用した根拠が明らかにされるべきであろう。それだけに、読みが一致している可能性の高い W と K の、この箇所での不一致には、誤写、誤読、誤植の可能が残る。しかし、W の保管場所が不明である現状では、これ以上の論究は困難である。また、*jñābhijñātai* A. Ca. Cb. の記述は重要である。Ca (= C4) と、欠落している Cb (= C5) の読みを A と同一視している。ところで、C3 の読みは *jñātābhijñātaiḥ* である¹⁸。Kn の Preliminary Notice の Ca, Cb がそれぞれ Add. MS. 1682 (正しくは1683), 1683 (正しくは1684) の誤記 (あるいは誤植) となっている点を勘案すれば、この脚

注の読みに C3 の読みが紛れ込んだのではないかという推測も全くの的外れでないかもしれない。南條は、校合に用いたケンブリッジ大学の 2 本の写本は、ケルンが英訳の底本にしたものと同じ写本 (C3, C4) だと述べている¹⁹。ただ、C3 は、Kn 254.2 以後の後半部分が失われているので、それ以後に C3 を参照して脚注に記すことはありえない。この間の事情の解明は、今となってはひじょうに困難である。

Kn 2

- (1) fn. 1) Left out in A. B. Cb. K. W. の Cb は不要となる。前出の Kn 1 (3) fn. 5) を参照。
- (2) fn. 2) *kapphi and kamphi* O. *kaphi* the others. は、*kamphi* O.²⁰ *kaphi* A. K. *kahphi* B. *kaph(?)phi* Ca. となる。校訂本の読みに O を採用したと思われる。
- (3) fn. 3) *lle* A. *ne* Ca. O. *nde* K. には、*ne* B. を追加する。
- (4) fn. 4) *ku* K. は、*kku* Ca. O. *ku* A. B. K. となる。
- (5) fn. 5) *mahā* left out in B. O. は、*mahā* left out in Ca. B. O. となる。
- (6) fn. 7) *pūrṇena* A. K. *paṇa* B. は、*pūrṇena* A. K. *pūrṇo* Ca. *paurṇa* B. となる。本文の *pūrṇa* は O の読みを採用しているが、このことに言及されていない。
- (7) fn. 9) *pati* A. K. *patīrgautamī* Cb. は、*pati* A. K. *patī* Ca. B. *patīgautamī* Cb. *patībhikṣuṇī* O. となる。ここでは、Ca. B. の読みが本文に採用されている。W の読みは記されていない。
- (8) fn. 10) *rbhi* in B. only は、*bhiḥ* Ca. *bhir* B. O. となる。A. K. Cb は複合語になっている。
- (9) fn. 11) はたんに、*ti* left out in K. としないで、*ekajātipratibaddhair yad uta*^o left out in Ca. Cb. O. *°baddhair yyad uta*^o A. *°baddhair yady* B. *°pra(ti)baddhair yad uta*^o K. と注記すべきであった。
- (10) fn. 12) *yāḥ dher** B. K. は、*yāḥ dher* Ca. B. *yāḥ dhe(r)* Cb. となる。
- (11) fn. 13) *rtti* W. は、*rtti* W. *rtyai* A. K. *rtta* Cb. *rtika* O. となる。Ca, B が本文として採用されている。
- (12) fn. 15) *srai* K. は、*srai* K. left out in Ca. Cb. となる。

Kn 102

- (1) fn. 6) Sic P. *anuhiṇḍamānaḥ* O. *paryeṣamāṇo* the rest. は、*paryyaṣṭhamāno* A. *paryatṭamāno* Ca. *paryeṣamāṇo* Cb. *paryatamānonn* B. *paryeṣamāno* K. となる。ここではフコーのテキストの読みを本文に採用し、Cb の読みを the rest. としている。同じページの 8 行下の Kn 102.14 にも同じ語が見られる。その箇所での読みは次の通りである。*paryyeṣamāna* A. *paryeṣamāṇo* Ca. Cb. P. O. *°naḥ* B. ここは、fn. 6) の *paryeṣamāno* Cb. と同じ読みを採用している。
- (2) fn. 8) *bhūyo* Ca. Cb. K. *bhūyāṃ* P. *bhaved** O. は、*bhaveyaṃ* A. Ca. *bhūyo* Cb. *bhūyaṃ* B. *bhūyāṃ* K. P. *bhaved* O. となる。この章では K と P の読みがよく一致する。

(3) fn. 9) *t** A. Cb. *ta* Ca. *yāt** K. P. は、*°bhumjīt** A. *°bhumjīta* Ca. *°bhuñjīyāt** Cb. K. P. *°bhuñjīta* : B. *°bhumjeta* : O. となる。

Kn 119

(1) fn. 1) *bodhī ca* Cb. *bodhāya* A. B. Ca. *bodhiya* K. P. は、*bodhāya* A. B. O. *bodhiya* Ca. P. *bodhīca* Cb. *bodhiya* K. となる。

(2) fn. 11) *śayyā* O. *śayā* P. は、*sayanā* A. B. Ca. *śayanā* Cb. K. P. *śayyā* O. となる。

次に、(b)の問題点に関連して、グループ分けのキーワードに着目してみたい。

Kn 29.12–30.2

mahāścaryā(dbhuta)prāptāḥ (śāriputra tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ | alaṃ śāriputra etāvad eva bhāṣitaṃ bhavatu paramāścaryaprāptāḥ śāriputra tathāgatā arha=ntaḥ samyaksambuddhāḥ | tathāgata eva) śāriputra tathāgatasya dharman deśayed

写本 A (= R) には、() 内の箇所が欠落している。A を底本とした以上、どの写本で A の欠落箇所を補ったかを脚注に記すべきであった。筆者は、この欠落箇所の補充には、「R系」写本群を参照すべきであると考え。その場合、下線部分は *bhāṣitaṃ* と記さねばならない²¹。T9 の他に T4, T5, A2, A3 がこのように読んでいるからである。A2 と A3 は、たがいに類似し、テキストの多くの箇所で R 系写本群とも一致する。なお、Kn 29 fn. 11) は不要と思われる。

Kn 48.11 (68ab)

evaṃ ca bhāṣāmy ahu nityanirvṛtā ādi praśāntā imi sarvadharmāḥ |

校訂本の本文はこのように読み、下線部分についての脚注はない。しかし、このような箇所にこそ、脚注は次のように付けられるべきであった。

adiprasāntā A. *ādiprasāntā* Ca. Cb. *ādiprasāntā* K. O. *ādipravṛttā* B. なぜなら、校訂本の発刊以後に公表された写本で、下線部分が B と同じ読みの写本は、K, C6, T2, T3, T6, T7, N2, N3 のように、多数存在するからである²²。これらのなかで、C6, T6, T7, N2 は、B, A1 と共に「B系(戸田宏文の命名)」と称される写本群として分類される。これら以外の写本の読みは、*ādiprasāntā* C3, T9 *ādi[h]prasāntā* C1 *°śāntā* C2 *ādiprasāntā* T4, T5 *ādiprasāntā* A1, A2, A3, P3 *°pra[r]śāntā* N1 となっている。なお、A の *adi°* は、*ādi°* の誤写である。ここは、「R系」の結束が乱れている、比較的稀な一例である。

5. 書写年と書写生について

この写本の書写年は不明とされてきた²³。しかし筆者は、*guṇayamanidhivarṣe* (173b6) の記述から、この写本の書写年をネパール暦の *saṃvat* 923 (西暦1802/1803年頃) と考える。*guṇa*

は3, *yama* は2, *nidhi* は9を表す。*guṇa* (=3) と *yama* (=2) は、用例が多いので容易に分かる。問題は *nidhi* であるが、これは、富と財宝の神で北方の守護神であるクベーラ (毘沙門天) の九種の宝を意味することから、9を表すと理解できる²⁴。

R系の写本で書写年の確認できるものはT4である。バルフ (Willy Baruch, 1900–1954) は、T4の書写年を *saṃvat* 921としているが²⁵、正確には、*saṃvat* 927である。R系写本群にとって、この違いは大きい。なぜなら、T4はRの2年前に書写されたのではなく、4年後に書写された事になるからである。R系に近い読みを含む紙写本で書写年の分かっているのはA2である (*saṃvat* 833)。A3はA2とひじょうによく類似した紙写本で、テキストの後半部分ではA2と共に、ほぼR系に類似する読みを維持している。

この写本の書写生はアムリタナンダ (Amṛtananda) である。奥書には、*vyalikhad amṛta-nandaḥ* (173b7)とある。この書写生は、アムリタ・パンディタ (Amṛta Paṇḍita), アムリターナンダ (Amṛtānanda) と同一人物であるかもしれない²⁶。断定はできないが、いずれも、19世紀前半の書写年であることを勘案すれば、その可能性は十分に考えられる。

注

1. この序は『東洋哲学研究所紀要』第21号 (2005) に掲載された「『ケルン・南條本』再考」に若干の修正を加え、さらに、5. 書写年と書写生について、を追加したものである。

2. Kern and Nanjio (1908–1912). 本書での略号はKn.

3. Kern and Nanjio (1908–1912, Preface p. Iff.), Baruch (1938, pp. 7–8).

4. これが、英国・アイルランド王立アジア協会に所蔵される梵文法華經写本 (略号R, 校訂本での略はA)である。なお、梵文法華經写本の略号については、梵文法華經写本略号一覧を参照。

5. 現在は、大英図書館に所蔵されている。

6. 湯山 (1970, pp. 4, 16). この写本の読みは、ビュルヌフ (Eugène Burnouf, 1801–1852) の仏訳の底本となったパリのアジア協会の写本P3の読みによく一致する。

7. マックス・ミュラー (Max Müller, 1823–1900) は、この書物のコピーをワイリーから入手したと思われる。それが、南條によって校訂本の第24章の校合に使用されたと考えられる。脚注にChの略号で記されている。湯山 (1970, pp. 20, 45).

8. 「15種類」というのは、現時点で確認されている紙写本のおおざっぱな数で、未発表等のものを勘案すると、正確な本数は不明である。

9. 戸田宏文が開拓した、「ネパール系写本のグループ分け」の研究は、この經典のネパール系写本の数、他の經典と比較して、類例を見ないほど多数存在するという特別な条件によって成立している。従って、この研究の推進が、梵文法華經の原典研究に不可欠な条件の一つである。筆者の研究課題は、この「ネパール系写本のグループ分け」である。

10. Kn (Preface p. II) 参照。辛嶋 (2003, p. 85) を参照。“Kern-Nanjio’s edition is based mainly on

the collation of the six Nepalese manuscripts, to which Kern inserted readings of the so-called ‘Kashgar’ manuscript in a very arbitrary way.” 戸田宏文は、ケルンによる O の読みの挿入の問題を指摘している。戸田 (2000a)

11. 第24章「普門品」のワイリーのテキストは、その系統を見極めることが困難なので除外する。

12. 戸田 (1997, p. 16).

13. 「R系」は、編者が戸田と T8 を読解していた勉強会 (小槻 2003, pp. xxi–xxii) で、戸田が毎回、何度も口にした呼称である。彼は論文では「紙写本 R, T5, 9 というグループ」(戸田 1996, p. 115), 「ネパール写本 (紙本) グループ I R, T9, 4, 5」(戸田 1997, p. 4) と記している。

14. バルフは、C1, C2 も「R系」に近い写本と判断している。“Gehört mit R, Aa, Ac, Cd und Ce zu einer Gruppe.” バルフ (1938, p. 3) この傾向は、11–14 章、19–27 章で見られると、筆者は判断する。また、この二写本は、1–2 章で Pe に類似する。戸田 (1998, 1999) を参照。

15. それでも「R系」写本群の読みが、稀にバラツク場合がある。例えば、Kn 48.11, 370, 460.2, 475.5, 475.10 の辺り。R の読みに最も近い写本は T9 である。

16. 戸田 (2000, p. 63).

17. 小槻 (2003, p. 3).

18. 戸田 (1998, p. [2]).

19. 南條・泉 (1913, 緒論 p. 2). Kern (1884, p. xxxviii).

20. 戸田 (1981, p. 5).

21. 戸田 (1998, pp. [32], [34]).

22. 戸田 (1996, p. 22).

23. Baruch (1938, p. 3), 湯山 (1970, p. 16).

24. Monier (1982, p. 548, R), Apte (1970, p. 288, R), Jhalakikar (1990, p. 15), 古賀・高橋 (2006, p. 737, L) を参照した。これらの労作に心からの感謝を捧げたい。

25. Baruch (1938, p. 5).

26. Vogel (1974, p. 203), Bendall (1992, pp. 76, 133, 212). Mitra (1981, pp. 79, 99, 274) Filliozat (1941, p. 84).